

## 【書評】

### 伊藤宣広『投機は経済を安定させるのか？——ケインズ 『雇用・利子および貨幣の一般理論』を読み直す』

現代書館，2016年，238頁

本書は「いま読む！名著」シリーズの一冊であり、副題には「ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』を読み直す」とある。『一般理論』はスミスやリカードの著作と並ぶ古典となり、滅多に読まれなくなって久しい。評者の学生時代には難解な『一般理論』をめぐる解説書も多数出版されていてさまざまな「ケインズ経済学」があり、解釈をめぐる論争に触れる機会も多かった。今日でも「ケインズ経済学」は教科書の主要な項目であるとはいえ、絶滅危惧種の標本のような存在になっているといったら過言だろうか。「読み直す」という副題も、この著作にもう一度目を向けて欲しいという筆者の願いを込めたものであろう。

『一般理論』にはさまざまな面があるが、一般的には、財政政策の基礎を提供したもので、乗数理論がその最も重要な部分と考えられている。しかし、本書の書名にあるように、本書の真の狙いは貨幣・金融面への注目にある。これこそがケインズ『一般理論』の最も重要な論点であると同時に最も難解な部分でもあり、それ故に「読まれない」原因ともなっている。したがって、『一般理論』に読者を誘うには、この部分を、本質を失うことなく、いかに分かりやすく説明するか、がポイントになる。

まず、本書の構成を見ていこう。著者は、序章で投機と投資の関係について述べ、ついで第1章ではケインズの略歴とケインズ経済学のエッセンスを紹介する。これだけで全体のほぼ半分を費やしている。

第2章では、マネタリズム以降におけるマクロ経済学の状況を概観している。この分野は類書も多いが、ここではミクロとマクロ（ことに上級マクロ経済学）の関係について、著者の憂慮が表明されている。社会は個人の単なる寄せ集めではないということからケインズは敢えてマクロ経済学という新分野を切り開いたのであるが、その意義が忘れ去られようとしている。

第3章では投機家としてのケインズの実践を紹介し、そこから彼が得た社会についての考え方に触れている。ここで最も重要と思われるのはストックの重要性を経済理論に導入したことであり、流動性選好説こそがその成果である。

第4章は、これまでの章で述べてきたことを承けて、本書の目的である投機をめぐる経済思想を扱っている。この章の前半で検討するのは、完全競争という基本的な概念の妥当性である。教科書では、個々の市場参加者は同じ大きさのプライス・テイカーであり、誰も価格に影響を及ぼすことができないとされている。しかし、現実の株式市場はクジラと雑魚が住む世界である。現実重視のマーシャルは完全競争などというばかげた想定はしていないし、ケインズもその伝統の中で育った。投機の世界は、伝統的なミクロ経済学がベンチマークとする完全競争と、そもそも相容れないのである。

つぎに筆者は、投機擁護論を展開するフリードマンに言及している。著者によれば、それは、投機家が安値で買って高値で売り抜

けるという逆張りの想定に立っている。しかし、ケインズが美人投票で想定する投機家の行動はそれとは逆である。それは現実の値上がりからさらに値上がりを期待して買う（逆の場合は逆）順張りを想定しており、これも伝統的なミクロ経済学の市場調整メカニズムとは相容れない。筆者はまた、投機を扱う現代ファイナンス理論の考え方を引き合いに出し、ケインズやマーシャルの考え方の対比を試みている。

終章は「ケインズと現代」と題し、投機に関するケインズの遺産を再評価する。資本主義の世界では投機は必然的に存在するし、害悪をもたらすばかりではない。投機には功罪両面があるが、現代世界ではストックが余りに巨大化しており、投機の悪影響から逃れることができない。ここに、投機に向き合う難しさがああり、ケインズは制度的に一定の制限を加える必要性を主張している。以上が本書の概要である。

著者は、ケインズ解釈について、すでに複数の書物を発表している。とくにマーシャルやロバートソン等、従来の「古典派」のイメージとは異なるケンブリッジ学派を評価する立場から、ケインズだけが突出した存在とは見ていない。また、ケインズについても、常に周囲の状況に照らして考え方を柔軟に変化させてきたことから、『一般理論』も1つの通過点に過ぎないとしている。

その上でなお『一般理論』、ことに投機の問題に着目するのは、それが現代においてますます重要な問題になっていると著者が判断するからである。『一般理論』では美人投票の例も挙げられているが、これに基づいて利子率の決定を理論的に説明したものが流動性選好説である。しかし、評者の経験では、学生が躓くのはまさにこの箇所である。利子の付く債券を保有するのはなぜ危険なのか。無利子の貨幣はなぜ保有されるのか。人々が抱

く期待はなぜ異なるのか。これらを理論的に分かりやすく説明するのは難しい。ケインズ自身、『貨幣論』では弱気関数を提示したが、この議論は不十分であったとして、『一般理論』では異なる議論を展開している。流動性選好説と弱気関数とはロジックが異なるのである。

投機には期待がつきものである。投機を真正面から取り上げた『一般理論』に対して期待が扱われていないという解釈が出てくるのも、流動性選好説の難解さを考えれば無理からぬことである。しかし、ケインズ経済学の核心部分を解説することは本書の使命であり、こうした誤解を解くには流動性選好説の分かりやすい説明が不可欠である。筆者もこの点には留意していると思われるが、本質を失うことなくより分かりやすく説明することは、評者も含めて、マクロ経済学を講ずるものがさらに努力すべき目標である。

現実に目を向けると、変動相場制の下で日々の為替レートに影響を与えているのは、輸出入というよりもむしろ資本取引である。そして、ファンドマネージャーによって運用されるサラリーマンの確定拠出年金などは、その資金の1つの有力な源泉となっている。ケインズは所有と経営の分離を唱えたが、今日ではさらに進んで所有と運用が分離されている。金利生活者は安楽死するどころか、年金を所有する労働者を加えてますます肥大化している。ケインズは投機が利子率の決定を通じて企業の投資活動に影響する社会を描いたが、今日、投機はわれわれの老後さえ左右する時代になったのである。

こうしたことを考えると、本書が投機の問題への重い扉を開き、多くの人々がこの問題について考えるきっかけを提供したことを高く評価したい。

(袴田兆彦：中央大学)